



メモリアルルームには、昭和から平成まで、卒業生たちの写真が並べられている(写真上) 廊下と教室を隔てる引き戸は当時の物を再利用している(写真下)

グリーンツーリズムとは

「農山漁村でのゆとり休暇」
長期のバカンスを楽しむことの多いヨーロッパ諸国で普及した余暇のスタイル。農山漁村にゆったりと滞在し、農山漁業の体験やその地域の自然・文化に触れ、地元の人との交流を楽しむ余暇活動のこと。

日本でも、恵まれた自然環境と四季の変化、その土地特有の農林漁業、伝統、生活、文化など、都会で生活する人にとって、日ごろ馴染みのないものに大きな関心が寄せられるようになった。

学校の話が出たとき、周辺住民たちは少子高齢化が進む時期に中学校までなくなればより一層過疎化に拍車がかかり、地域が疲弊してしまうという不安を持っていた。だから廃校にしないでくれと、反対する意見もあった。けれど、子どもたちによりよい教育環境を提供するためにという思いから、現在の菊池北中学校との統合を決めた。未来を担う子どもたちを思っ

た。このままでは校舎まで取り壊されてしまつて。廃校が決まってしまう住民たちの思いは「校舎を残したい。そして何かできることはないだろうか」というものだった。子どもたちが消えた校舎を取り壊すことなく、新しい施設として活用できないかと考えたのだ。

自分たちだけでなく、市へも協力を求め、市による校舎の維持管理と木造校舎を活かした有効活用を主な要望として提出した。これに対して市が出した答えは、「校舎の現状保存と管理を約束すること」「跡地利用には地元など話し合う」というものだった。また、自分たちにもできることから、各地区の持ち回りで校舎の清掃作業を行った。



交流館の入口に作られた看板。中学校の看板もそのまま残されている。

学校が消えた

子どもたちのために

平成12年3月、旧菊池市立菊池東中学校が廃校になった。最後の生徒を送り出した木造校舎は、廊下を走る足音も、黒板に書かれたらくがきも思い出として、ただ静かに取り壊される時を待っていた。校庭ではしゃぐ声もなく静まり返った校舎には、春の暖かい日差しだけが差し込んでいた。

「終わりから始まるもの

伝統と歴史のある校舎を残したいという思いは、維持管理や補修を集落の住民で負担し続けなければいけないという課題を生んだ。それは過疎化が進む地域にとって、大きな負担となるものだった。

それからは協議会と市、住民が参加してアイデアを出し合った。ワークショップや先進地視察研修も行い、「何ができるのか」「何がやりたいのか」を考えた。そしてそのアイデアを具体化すべく、市と協議会はグリーンツーリズムに取り組むことになった。

田茂樹理事長を訪ね、廃校利活用に関する協力を求めた。地域住民や柳田理事長の協力もあり、平成15年5月、廃校になった学校は「きくちふるさと水源交流館」として新しい一歩を踏み出した。

笑顔に会いたい

特集

菊池深谷のすぐ近く、「水源」と呼ばれる地域に、廃校となった校舎を利用したグリーンツーリズムの拠点施設がある。木造校舎の木のぬくもり、昔懐かしい板張りの廊下、季節ごとに移り変わる窓から見える景色。地域住民の思い出が詰まったこの施設には、今もたくさんの思い出が増え続けている。